

そよかぜだより

第104号
発行 2011. 1. 16
毎月1回発行
社会福祉法人
そよかぜ

連絡先

ひばり園 578-0855
FAX 578-0466
くれよん 578-2575
つくしの家 578-0855
エール 570-1233
スマイル工房 578-2723

資源回収時のご連絡は
「ひばり園」へ

平成二十三年の新春を迎えて

社会福祉法人そよかぜ 理事長 野崎功市

明けましておめでとうございます。皆様には、健やかに新春を迎えられたこととお喜び申し上げます。今年も関東地方は、初日の出が見られ、穏やかな新春を迎えることができました。しかし、暮れから正月にかけて日本列島は大寒波に見舞われ、東北地方をはじめ日本海側各地では豪雪による被害が続出し、不自由な生活が、今なお続いている地域もあるようですが、一日も早い平常生活への回復を願いたいものです。

さて、日本経済は、依然として円高、デフレなどの影響による景気の低迷と雇用不安を抱えながらの越年となりました。こうした状況下ではありましたが、昨年一年間、そよかぜの事業運営全般にわた

り、ほぼ順調な歩みを続けることができました。当初、不況の影響により心配されたひばり園の授産事業も、発注元会社のご配慮をいただき、就労継続支援B型事業では、ベアリング組み立て作業をはじめ農業機械部品梱包など利用実績、授産活動ともに一定の成果をあげることができ、就労移行支援事業においても、一名ではありますが一般会社への就職に結びつけることができました。また、就労支援センター・エールでは事業の開始から三年目を迎え、障害を持つ方々の就労支援に向けた相談援助や職場支援など、充実した活動を展開することができました。ただ、リサイクルショップくれよん事業は、競合他店の増加や安売り店の

ご協力ありがとうございました。 12月の募金 90,090円
(順不同) 平成22年4月～12月の合計 435,458円

並木 宏悦	様	阿部 光子	様	小谷野 美智子	様
加部 妙子	様	とまと美容室	様	桜沢 富子	様
居酒屋たんぼぼ	様	北野 浩美	様	臼井 信行	様
帯刀 幸子	様	古沢 奈保美	様	臼井 道子	様
清水 賢	様	森田 勝	様	大野 元雄	様
清水 知子	様	井上 誠一	様	阿部 郁子	様
宮沢 啓	様	袴田 実	様	天満 喜代子	様
山下 暉枝	様	関村 理	様	橋本 亜紀子	様
濱野 岬	様	関村 英希	様	平岡 知子	様
榎本 正代	様	清水 キヨ子	様	長谷川 キヌ子	様
松岡 竹子	様	尾又 恭子	様	角野 克子	様
角野 満壽子	様	増田 一仁	様	関谷 博	様
斉藤 忠	様	宇津木 忠雄	様	大野 素子	様
田村 由親子	様	国本 昭治	様	田中 稔	様
田村 千佳	様	土屋 三枝子	様	永岡 智恵子	様
竹内 照夫	様	大内 たま子	様	田中 明子	様
下田 コウ	様	川崎 利男	様	桜沢 喜作	様
本間 正彦	様	小沢 達子	様	山影 幸子	様
渡辺 四郎	様	吉野 満里子	様	平野 喜子	様
山崎 六雄	様	ア-サロンカワノ	様	ア-バンベンディックス	様
榎八洋	様	匿名様(3,606円)			

ご連絡は、ひばり園へ
羽村市栄町3-3-1
042-578-0855

くれよん12月の売上げ
764,820円でした。

羽村市内の小学校と中学校の生徒のみなさんが、各学校単位でプルトップ収集にご協力して下さいます。ありがとうございます。

進出などの影響を受け、売上げ額が激減し、非常に厳しい経営状況となりました。今後、運営方法など根本的な見直しが必要と思われます。なお、懸案でありました精神障害者家族会が運営するスマイル工房も、昨年四月から当法人の運営に（裏面につづく）

社会福祉法人 そよかぜの

《資源回収》に

ご協力をお願いします

新聞、雑誌、ダンボール

(ボロは扱っていません)

12月は34,080tでした。金額は602,638円となりました。この収益は、社会福祉法人そよかぜの運営資金になります。みなさまのご協力ありがとうございました。

2月は第3日曜日20日です。

統合し、障害者自立支援法に基づき新体系サービス事業所の一部門として活動を開始することができました。そのほかグループホームほほえみ館、宿泊訓練施設つくしの家、資源回収事業などについては、特に大きな問題もなく推移することができました。

これもひとえに、行政当局をはじめ関係企業、団体、市民皆様の暖かいご支援、ご指導の賜物であり、あらためて深く感謝を申し上げます。

本年も厳しい経済状況下にありますが、一人でも多くの障害者が安心して働くことができる環境整備と取り組みに向け、役職員一丸となって努力して参りたいと思います。

どうか、本年も関係者皆様の変わらぬご支援、ご協力をお願いし、新年のご挨拶とさせていただきます。

平成二十三年一月十日

「親子が一緒に暮らせる終のすみ家は」

年老いた親たちの夢の話

毎年のお正月休みには、施設に入所している息子が帰ってきて、親子二人で過ごすのがこの二十数年来のわが家の慣例になっていたのですが、今年残念ながら息子の体調が悪くて連れて帰ることができませんでした。その代わりに三が日は私が面会に行き、楽しみにしていた帰省が潰れたことの穴埋めにしました。

二十年前の施設といえば、お正月はほとんどの利用者が帰省していて、広い建物はガラランとして人影がなく気味がわるいほどでしたが、最近では保護者が高齢化したため帰省できる利用者が少なくなり、三が日といっても普段と変わらなくなりました。

年末に施設に行つて「いつものように連れて帰るつもりです」といったら、職員が私の顔をじっと見て「お父さんどうか無理をしないで下さい」といいました。これは息子の体調もさることながら、私自身が年をとったので「ひ

対に大丈夫、心配しないで」と約束したんです」

女性B「でもね、兄弟は他人の始まりつていうからね。この施設に兄弟が来ることはほんとうに少ないよ。親がいれば無理やり兄弟を連れてくることはあるけどね。お正月なんだから、家の人はなんと

いっているの」

男性「私は結婚する前から、家内をこの施設に連れてきて兄のことはよく承知したうえで結婚したんです。だから仕方がないと思っっているんですよ、何もいけません」

女性C「えらい！、兄弟の鏡だ。あなたのお母さんはね、いつ来てもこの控え室の真ん中においてね、施設のことなんでも知っていたから、いろんなことを教えてもらったわ。そんな人が少なくなっていくんだよね」

私「でも、あとのことを頼める兄弟がいる人はいいよね、うちのよう一人っ子だと、私が死んだらもう誰も面会にくる者はいないんだから」

女性D「それは仕方がないよ、誰だっていずれそうなるんだから。誰も来なくなつても、この職員が、その子をほつたらかしにすることはないよ、ちゃんと見てくれるよ。そう信じるよりほかに何もできないんだから」

女性A「そういえば、〇〇さんのお母さんは、最近顔を見なくなつたと思つたら、老人ホームに入ったんだって」

(この女性は、足が悪くて、お父さんが車椅子を押して面会に来ていた人)。

女性B「くやしいだろうなあ、老人ホームのベッドに寝て、子どものことを考えているんだらうに。お正月になつても会えないんだから」(と

いって涙ぐむ、一同シーンとなる)

女性C「こんな時は、子どもの方から面会に行けばいいんだよ。この職員が子どもを連れて老人ホームに行けばいい。それぐらいのことはやってくれてもいいと思うんだけど、そうでもしなければ生き別れだよ」

女性A「それは無理だよ。千葉県のホームだから、行けば一日仕事だもの。ここだって職員は足りなくていっぱいやってるんだから」

女性C「近ければねえ。…」

そうだ、この施設は敷地が広いんだから、この中に老人ホームを作ってくれないかしら。それで親を入れてくれたら最高ね、死ぬまで親子一緒に暮らせるわけよ。それができたら私、一番に入るわ」

女性D「だめよ、あなたのように丈夫な人が老人ホームに入れるわけじゃないでしょう。どこのホームもすごい順番待ちなんだから。障害者の親だけ優先してくれるわけじゃないしね」

男性「老人の施設と障害者の施設が合体して一緒にやっているところはありますか」

女性一同「聞いたことはないけど、将来の夢だね。私たちが生きてるうちはまだ無理だろうけれど」

「脱施設で地域生活へ」の掛け声とともに、いま全国に障害者のグループホームやケアホームはたくさん作られています。親の老後まで託せる終の棲家(すみか)とはならないでしょう。親が安心して死ぬ時代はいつ来るだろうか、考えながら帰ってきました。